

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業選定3事業

文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業選定3事業のシンポジウムが昨年、開催され、研究成果などが発表された。

歴史学研究センター

日仏共同研究が成果

「M・ベルンシュタイン文庫」調査進み希少性明らかに

国際シンポジウム「フランス革命研究とミシェル・ベルンシュタイン文庫」(社会知性開発研究センター／歴史学研究センター主催)が11月24、25の両日、神田キャンパスで開催された。「フランス革命と日本、アジアの近代化」の最後を飾る今シンポの“主役”は本学所蔵のフランス革命史料「ミシェル・ベルンシュタイン文庫」。4万数千点を数え、革命関連史料としてフランス国立図書館に次ぐ規模の同文庫は、本国にも存在しない史料が多数あることが、日仏共同研究で判明。その報告がなされた。



▲左から司会の山崎耕一教授、近江教授、プジョルス研究員、朱教授、ムカジー教授

パリ第一大学フランス革命史研究センターのマリア・ベトゥレム・カステラ・プジョルス研究員は、同文庫目録第6巻をフランスの図書館や文書館所蔵の史料と照合。その結果、冒頭から1017件の史料中393件はオリジナルのもので報告。「これらは各都市の議事録、法令、苦情書や陳情書、市民たちの演説、手紙などで無名の市民が何を考えていたかを教えてくれる」と語った。

また歴史学研究センター代表の近江吉明文学部教授は、同文庫のオート・ロワール県(革命期はル・ピュイセネシャル管区)ル・ピュイ市の第3身分(一般庶民)陳情書の分析やオート・ロワール県関連の仏革命史料の調査から同文庫の希少性を明らかにした。

ほかにハイダラバード大学のリラ・ムカジー教授、韓国教員大学校の朱明哲教授も報告を行った。

シンポを終え近江教授はM・ベルンシュタイン文庫の存在は「世界のフランス革命史研究者の中であらためて認識されたのではないか」とした。「アジアのフランス革命史研究者の組織ができた意義も大きい」とプロジェクトの成果を語った。

中小企業研究センター

アジア成長の原動力

中小企業の競争力を分析

「アジア諸国の産業発展と中小企業」プロジェクト(社会知性開発研究センター／中小企業研究センター)による第3回国際シンポジウム「アジアの競争力と中小企業」が12月1日、神田キャンパスで開催された＝写真。



同プロジェクトは、アジア諸国の中小企業をテーマに、04年度から学際的な研究を行っている。当日は約80人が聴講。国内外の4講師が近年、経済発展の目覚ましい北、東アジア、アセアン諸国での中小企業の競争力、収益性、経営課題、環境対応などを分析し、将来の展望を追究した。

講演とパネルディスカッションでは手嶋宣之商学部准教授が司会を務め、深沢政彦A・T・カーニー本社取締役兼中国オフィス会長が、成長著しい北アジア(日本・韓国・中国)を分析。特にM&Aで技術買収を進

め、低コストで完成品を輸出している中国が成長のカギを握ると予測した。

森島寿京都大学大学院地球環境学准教授は、日本を含む東アジアでの公害対策の現状と、処理設備、環境保全型商品などの開発に取り組む中小企業のビジネスを紹介。

于卓民台湾国立政治大学商学院企業管理学系教授は、台湾の大企業と中小企業の比較を、小林守商学部講師(中小企業研究センター研究員)が、アセアン諸国の中小企業の現状と経営課題に論及。会場からも熱心な質疑があり、関心の高さが示された。

都市政策研究センター

「臨海部の再生」提唱

ポスト工業化 川崎の将来構想

都市・川崎の再生をテーマに、具体策研究に取り組んでいる「イノベーション・クラスター形成に向けた川崎都市政策への提言」プロジェクト(社会知性開発研究センター／都市政策研究センター)の07年度公開シンポジウムが12月8日、神田キャンパスで行われた。テーマは「京浜臨海部の再生に向けて」。この模様は川崎市産業振興会館と生田キャンパスにも同時中継され、約140人が聴講した。



はじめに平尾光司経済学部教授(都市政策研究センター代表)が、現在までの取り組みについて述べ、横浜国立大学大学院の中村剛治国際社会科学部教授が基調講演で、世界各国の都市再生について成功事例を紹介。川崎のポスト工業化ビジョンとして(1)海辺の再生(2)多摩川のウォーターフロントと市街部とを結び、産・学・住を有機的に連関させる臨海公園都市構想などを提言した。

パネルディスカッションでは福島義和文学部教授(都市政策研究センター研究員)が司会。中村教授のほか、川崎市総合企画局の高橋哲也施策推進担当主幹、(社)日本プロジェクト産業協議会の内野善之主任研究員(都市政策研究センター客員研究員)、(NPO法人)産業・環境創造リエゾンセンターの瀧田浩専務理事、東京ガス(株)の永井猛エネルギー企画部部長が、川崎再生への施策について活発な討論を展開した=写真。

商学研究所シンポジウム

企業価値向上へのリスクマネジメント

5講師が講演

製品の表示、安全性などを起因として、企業に対する信頼が大きく揺らいでいるなか、商学研究所が「企業経営と現代的リスクマネジメント—企業と利害関係者の価値向上をめざすリスクマネジメント経営を求めて—」と題する公開シンポジウムを、11月17日に神田キャンパスで開催した。

まず、同研究所長の上田和勇教授が「ロスとチャンスへのマネジメントによる企業価値向上」をテーマに講演し、企業価値の中で重要な要素は無形資産（知的資産、顧客、企業への信頼、組織風土など）

で、これらの強化がリスクによるロスを最小化すると共にチャンスにつながると指摘。このあと杉野文俊准教授が「製品安全とリスクマネジメント—消費者保護の新時代へ向けて、PLからCSRへ—」を、(財)製品安全協会の越山健彦業務グループ調査役が「消費者の安全・安心のための製品情報の開示—不祥事としないための緊急リコール告知について—」を、首藤昭信准教授が「リスク情報開示と企業価値」を、伊藤和憲教授が「医療の質とバランスト・スコアカード(BSC)」について講演した後、パネルディスカッションに移った。リスクマネジメントの諸問題への対処に論及し、聴講した企業関係者、学生から質疑が相次いだ。



▲会場の質問に答える上田所長ら5講師

エクステンションセンター公開講座「歴史を紐とく」 古代アジアの国際交流を探る

小野妹子が607年に隋に派遣されてから1400年となることを記念し、エクステンションセンターでは、「歴史を紐とく 東アジアの国際交流を探る—遺隋使派遣1400年記念—」を共通テーマに公開講座を生田キャンパスで開催した。

東アジアの交流の歴史を日本古代から、東アジア世界史にまで視野を広げた各講師の研究報告は、従来の相模・武蔵を中心とした「歴史を紐とく」ファンのみならず、多くの歴史ファンを魅了した。休憩時間には講師に質問者が殺到する場面もあり、延べ1600人近い参加者の熱心さが目立った。

講師とテーマは次のとおり。

▽10月13日＝荒木敏夫文学部教授「推古女帝と遺隋使—7世紀 倭国の外交—」、皆川雅樹専大附属高教諭「遺隋使・遺唐使がもたらしたモノ」

▽11月17日＝飯尾秀幸文学部教授「東アジア世界の形成—降嫁・金印・冊封体制—」、山田智文学部非常勤講師(渋谷教育学園幕張中学高等学校教諭)「魏晋南北朝の中国と日本」

▽12月1日＝土生田純之文学部教授「7世紀の東アジアと古墳」、矢野建一 同教授「古代国家形成と『留学生』」



▲会場いっぱい参加者。古代ロマンに酔う

≪専修人の新しい本≫

専修大学社会科学研究所 社会科学叢書10 アジア社会における儒教の変容

土屋 昌明 編著

本書は、社会科学研究所に所属する5人の教員が中国・朝鮮・日本を主に、儒教を文化要素として共有した社会の変容を各種の側面から検討し、当該社会の東アジアにおける特徴を探る可能性を示そうとしたもの。

所収論文は、網野房子(法学部准教授)「豚と天神—朝鮮半島の巫俗と儒教の習合をめぐる一考察—」、仲川裕里(経済学部准教授)「『両班化』の諸相と儒教—イデオロギーの社会的上昇機能と限界—」、巖基珠(ネットワーク情報学部准教授)「東アジア三国における『剪燈新話』の存在様相」、前川亨(法学部准教授)「身体感覚としての孝—二十四孝と宝巻にみる孝の実践形態—」、土屋昌明(経済学部教授)「『理性の国』と文化大革命—梁漱溟における儒教の変容—」(専大出版局、本体3800円+税)。



スイスの労働協約

中野 育男 著

本書は、変貌の著しいスイス労働関係の集団的な側面に特に焦点を当て、使用者団体と労働組合との間で締結されるスイス労働協約の法理論的な特質を究明するとともに、その今日的な状況について分析を加えることを目的としている。そして、前著『スイス労働契約の研究』(1995年)で明らかにされたスイスの個別的な労働関係規制の特殊性に加えて、今回その集団的な労働関係規制の特質も解明されることにより、日本におけるスイス労働関係規制に対する包括的かつ体系的な研究のための橋頭堡(きょうとうぼ)が確保されることになる。スイスの労働協約の解明は、逼塞(ひっそく)した状況にある我が国の労働関係にとっても示唆的である(専大出版局・本体3800円+税)。



著者(なかの・いくお) = 商学部教授、主な担当は労働法、ほか。

西行の思想

自意識と絶対知

毛利 豊史 著

本書は、西行の思想を巡って、倫理思想史の方法論に立脚した作品理解に基づき、その思想の本質である自意識と仏の絶対知との不可避的關係に焦点を当てて、それに関する概念的解明を試みたものである。論述においては、西行の自意識を絶望的なそれと規定し、その自意識が絶望からの絶対知による絶対的救済を希求しつつ絶対知に漸近して行く経緯を跡付けた。



西行の自意識は、能因法師等の思想的先達の表現や、本地垂迹、菩薩等の仏を映現する緒観念を自らなぞり、和歌表現において絶対知の相似形を表わしつつ、絶対知の自己における絶対実現に迫っていくのである(専大出版局・本体3200円+税)。

著者(もうり・とよふみ) = 商学部非常勤講師。主な担当は倫理学。平16博士(哲学)取得(論文博士/専修大学)。

